作文指導ノート

――高等学校作文教室の課題――

尾西陽一

はじめに

高校生の書く生活は、学習ノートの記録、クラス日誌の記録、日記の記録ぐらいのものである。作文を書かせても、自己の感情の吐露は堂々とするが、説得力のある、筋のとおった文章を書く生徒は案外少ない。書く生活の確立は緊要な課題である。

生徒の書く生活の確立のために、どのような手順で、どのような指導をしたらよいのか、模索しているのが実状である。これから記述することは、私の作文指導ノートにメモしたことを素材にしたものである。整然とした作文指導の体系のもとに実践したことではなく、それこそ試行錯誤の報告にすぎない。文章を構想し、表現する営みとはどういうことなのか、また、その指導はどうあるべきかなど、問題は深い。このリポートを記述しながら、すこしでも課題解決の糸口をさぐりたい。

一　表現者への道

新しい学習指導要領の改訂にあたって、その「答申」の中で、国語科の「改善の基本方針」には次の文言が示されている。

小学校、中学校及び高等学校を通じて、児童生徒の発達段階に応じて、内容を基本的事項に精選するとともに、言語の教育としての立場を一層明確にし、表現力を高めるようにする。

国語科教育の刷新の視点として、

① 言語の教育としての立場の重視

② 表現力の育成

この二つが設定されている。言葉の機能面を重視した国語科の授業が営まれることが強く期待されているわけである。

作文指導を計画していくばあいにも、言語表現者のあり方、言語表現の機能とは何なのかを、明確にしていかねばならない。

ここでは、「表現者」としてのあり方について考えてみたい。

中西龍氏は良寛の〈戒語〉を紹介され、話し方についてつぎのように述べておられる。〈注1〉

良寛さんの、この〈戒語〉の中に、私はいつもいつも大切にしている一箇条があります。それは、〈すべての言葉はしみじみというべし〉というものです。これはいい言葉です。いい教えだと思います。

〈すべての言葉はしみじみというべし〉―この教えは、実に多くのものを含んでいるような気がします。言葉をしみじみと言うた

めには、まず自分自身、よく考えてからでないと言えません。

相手の立場に心づかいがないと、言葉はしみじみと言えないでしょう。

自分の心が優しさに充ちていないと、言葉はしみじみとは出てきません。黙る―沈黙ということの値打ちも知っていないと、言葉はしみじみとは相手に伝わりません。

この中西氏の指摘されている、

① よく考える ②相手の立場にたつ ③優しさをもつ ④沈黙の価値を知る、ということがらは、言語による表現行動にとって最も大切な事項であろう。

作文指導を実践していくばあいのよりどころとしても、この四つのことがらを基礎においていきたい。「表現者」として生徒を訓練する目標として、思考力・相手への配慮・人格性がいかに重要な事項かは、現在の高校生の実態を知るものにとって身にしみてわかることである。〈しみじみとものいう〉―この抑制された表現主体の形成が緊要な課題として再認識されねばならない。

無駄な冗舌か、極端な沈黙しかみられない現場の状況を再生する道は、〈しみじみものいう〉倫理の確立が中核的な指導目標として設定され、教師も生徒もこれを行動の原理としていく教室を具現したいものである。

二 表現力と語彙指導

適切な表現力を育てていくばあい、生徒の語彙力をしっかりしたものにしていく指導過程が検討される必要がある。確かな概念の形成と表現力を高めることとは密接な関連性があることはいうまでもない。

(1)読解教材からの指導

読解にあたっては、教材ごとに学習プリントを作成し、あらかじめ自宅作業を課している。その学習プリントの中に重要語句をプリントし、その語句を使用した短文をつくる作業をさせる。この作業の集積によって的確な語句の使い方、短文をつくる力を訓練することができる。

(指導例)

一、教材「論語―私の古典―」(高橋和巳)

次の語句を使って短文をつくりなさい。

①自己抑制がきかず、読んでいてむかっと腹をたて、

②歴史を隔てた人間の真実を感得する。

③書物に対する享受のしかたはいろいろあるが、

④私もまた自ら検証してみたわけでもなく、

⑤時空を越えてよみがえる。

二、次の語句はどんな意味で使われているのか。

①価値の多元化こそが、現代社会を最も端的に特徴づけている。(「多元的理性の目覚」・森本哲郎)

②価値の多元化が、人間の思考や論理に反映し、価値観を複層化した。(同)

③そもそも理性とは「連絡をつける能力」のことなのである。

(2)小テストによる指導

一、次の語の対立語を漢字で書け。

1原告↔（　　）　2原則↔（　　）　3肯定↔（　　）
4集中↔（　　）　5結果↔（　　）　6豊富↔（　　）
7独創↔（　　）　8広義↔（　　）

二、次の語句の意味を説明し、どうしてそういう意味になったか説明せよ。

(1)矛盾＝（　　）

(2)蛇足＝（　　）

(3)八風十雨＝（　　）

(4)韋編三絶＝（　　）

(3)語句の定義の方法から説明のしかたを学習する

教材文の中で、ポイントになる語句についてあらためてその定義をした文章を読む機会をつくり、ことばの世界を拡大していくことを目標とした学習である。

「ことばによって人間は他者に向かって自分を開く。何かを伝達したいという欲求、自分を理解してもらいたいという欲求から、人は文章を書く。」（「言葉から文章へ」谷川俊太郎）

〈ひらく〉

(1)天の岩戸の昔から、戸をひらくというのはめでたく、明るいこととときまっている。会を「閉じる」というのはめでたくないから、逆に「おひらき」にするという。「ひらく」とはすがすがしく、晴れやかな気持なのである。（「動詞人間学」）

(2)〔中が見えるように〕広げた状態にする。

「本をひらく」「ふたをひらく」

「胸襟をひらく」（「新明解国語辞典」）

国語科では、「表現」「理解」の活動をとおして、言語のはたらきを習得させることをもっとも重要な事項としなくてはならない。一つの教材を扱う場合、学習に重点をおく事項は生徒の実態、教材観等によってことなるのは当然であるが、言語を日常の生活において的確に使用することのできる訓練過程を意図的・計画的に学習指導の展開の中に位置づけなければならない。

語彙指導にあたっても、その語彙が自分のものとして定着するのは容易なことではないのである。語彙を中心にして学習者の思想を充実させ、世界観を拡充していくためには、かなり緻密な訓練過程が考えられ実践されねばならないことがわかる。この点、私の実践はまだ未熟な状態にとどまっている。

三　「表現」活動の入り口—書き出し文の指導

書くべき内容をもっていても、書き出しをどのようにかくかは骨のおれることである。最初の一文がうまくいけば、叙述は案外スムーズに展開する。生徒の叙述態度を観察していても、最初の文の創出に苦労しているのがわかる。文章表現指導の入り口として、この

書き出し文の構造とその指導例について考察してみたい。次の用例は、書き出し文の指導にあたってプリントしたものである。

①主題、話題を提示しているもの。

人間は「考える」ことなしには生きてゆくことができません。朝起きてから夜寝るまで、われわれは絶えず考えています。たとえば、外出前に空を見あげて、曇り空ならば、傘を持ってゆくべきかどうかと考えます。（岩崎武雄「正しく考えるために」）

②主題についての導入の役割をするもの。

フリッツ・ライナーというハンガリー生まれの指揮者は、背は低いくせにいつも長い指揮棒を愛用していたという。しかも、その指揮ぶりは、ほとんど動きのないもの静かなもので、時にはその長い指揮棒の先が空中で止ってしまったように見えるほどだったので、楽員たちはいつも大変神経を緊張させて、そのわずかな動きを追わなければならなかったと伝えられている。

（高階秀爾「音楽と人間」）

③一般的な考え方に否定的な見解を提示するもの。

日本人は、庭の愛好民族だといわれる。これは、外国人がこのんで日本人を評する言葉だが、私たち自身も、なんとなくそうおもっている。しかし、はたして、ほんとうにそうであろうか。たしかに、寺院や旧跡には、古今の名園といわれるものが数しれずある。名もない民家にも、国宝級の庭があったりする。どんなにたてつまった町家の奥にも、丹精こめられた坪庭が、幽玄のかまえをみせる。しかしそれらは、たいてい過去のものだ。現代住宅をみていると、いちがいにそうはいえない。（上田　篤「日本人とすまい」）

④とりあげようとする話題（概念）を限定し、主題を提示するもの。

論説文といえば、一般には新聞の社説や、雑誌の巻頭言などに代表されるような文章のことをいう。つまり、現在多くの人々の関心を集めている問題を取り上げて、それに論評を加え、更に建設的な意見や問題解決の方法などを提示する文章である。しかし、ここでは論説文をやや広い意味に解して、自分の意見・主張を述べるために議論を展開する文章と考え、それについて述べてみよう（高等学校現代国語三〈尚学図書〉所収）

筆者の想の展開にあたって、冒頭の部分の書き方にいろいろなタイプがあり、いろいろな話題の切り出し方があることを生徒は理解した。

いずれの書き出しの表現も、しっかりした文章であり、その後を読んでみたいと思わせる魅力をもったものである。この冒頭文のあとにどんな内容が展開していくのかがぜひしりたくなるものをもっていることが、書き出しの文章の基本的な条件であることを生徒は実感として把握したと思う。

この、書き出しの部分をみつめる―その表現方法を吟味していく態度は、文章の理解過程にも影響していく。文章研究の第一歩として大切な学習事項である。

この書き出し文の学習の際に、生徒の記述した文章を参考例としてあげておきたい。

二年生の二学期に、修学旅行の感想文の書き出し文を書かせたものである。自分の体験に即した作業であったためか、生徒は興味を

もってとりくみ、書かれた文章は個性的なものが多かった。

(1) ふりむくと、そこにも雪があった。

そびえたつ峰々のあい間から残雪が私たちを見おろしていた。それはもう本来の雪のようにもろくはなかった。

(2)「あー。待ち長げえー。まだ船に乗られんかなあ。」

約三〇〇名が別府港に整列する中で、私は、この修学旅行への期待を胸いっぱいに抱いて並んでいた。まわりの友の間でのおしゃべりも、旅行へ出発するうれしさがことばになってとびかっていた。

(1)のばあいは、修学旅行の中でもっとも印象の深かった北アルプスの雪渓の描写からはじめている。意外な書き出し方で効果を出している。(2)のばあいは、印象に残っていることばを方言をまじえて書き、別府港を出発するまでの、友人たちのおちつかない様子を活写している。いずれも、読み手の心をとらえる表現となっている。

書き出し文を印象的に書く練習としては、右にあげた作品は目標にほぼ達した例と考えたい。このような、はいりやすい作業からはじめることが作文の指導にとって重要なことがわかる。

四 「理解」から「表現」へ

(1)小論文指導の周辺から、

大学入試に「小論文」が課せらるようになってから、高校三年生になると、その添削指導を依頼してくる生徒が多くなった。やむにやまれない事情ながらも「書くこと」に積極的な意欲をもつ生徒がふえてきたことは国語科教育のために評価してよいことである。

①小論文指導のための視点

「言語生活」三三三号（昭和54年9月1日発行）に「小論文」が特集されている。

小論文についての座談会の記事の中で、作文を書かせるねらいについて各出席者はつぎのように述べておられる。

。鶴見直輔氏（三菱商事勤務）

論理構成力、文章構成力、一定の時間内で一つのテーマをまとめる力があるかどうか。面接のデータ・ベースのため。

。日野啓三氏（読売新聞社勤務）

㈠人がらがわかる。

㈡基本的な教養・学力（起承転結する力・中心のテーマをつかむ力）がわかる。

㈢文章力（文章のセンス）

。永野　賢氏（東京学芸大学）

書いている本人が、自分が書こうとしていることをほんとうにわかって書いているのかどうか。

昭和54年の一橋大学の二次試験では、津田左右吉の「上申書」を読ませ、その感想文を書かせている。その場合の「注意」につぎの項目が記されている。

次のイ・ロ・……への見地で評価するから、その点に留意して書け。

イ　自分の考えを自分のことばで明瞭に述べているか。

ロ　右の文章の論旨を正確に理解しているか。
ハ　自分の考えと、右の文章に述べられている考えとが、どのような点で一致し、または一致しないのか、を明らかにして書いているか。
ニ　論旨が明確に読者に伝わるように、文章を構成して書いているか。
ホ　適切な語句を用い、照応が正しく意味の明らかな文で書いているか。
ヘ　漢字・かなづかいにあやまりはないか。

前掲の座談会の記事、この一橋大の評価基準をみても、「小論文」指導の視点はあきらかである。すなわち、

㈠　思考力（よく考えられているか）
㈡　構成力（論旨が明確に伝わるか）
㈢　表現力（適切な語句が使われているか）
㈣　表記の正確さ

これらの基本的事項を指導目標に位置づけ練習させていく必要がある。

②「小論文」の指導例

。三木清の文章を読んで感想文を書く。

〔課題文〕

旅はつねに遠くて、しかもつねにあわただしいものである。それだからそこに漂泊の感情が湧いてくる。漂泊の感情は単に遠さの感情ではない。遠くてしかもあわただしいところから、我々は漂泊を感じるのである。遠いときまっているものなら、何故にあわただしくする必要があるであろうか。それは遠いものでなくて近いものであるかもしれない。いな、旅はつねに遠くて同時につねに近いものである。そしてこれは旅が過程であるということを意味するであろう。旅は過程である故に漂泊である。出発点が旅であるのではない。到達点が旅であるのでもない。旅は絶えず過程である。ただ目的に着くことをのみ問題にして、途中を味うことができない者は、旅の真の面白さを知らぬものといわれるのである。日常の生活において我々はつねに主として到達点を、結果をのみ問題にしている、これが行動とか実践とかいうものの本性である。（三木　清『人生論ノート』より）

〔課題〕右の文章を参考にして表題をつけ四段落の文章を六〇〇字以内に書きなさい。

指導の目標を、つぎの三点に設定した。

㈠　与えられた文章を正しく理解する。
㈡　与えられた文章について意見をもつ。
㈢　自分の意見を読み手にわかるように構成する。

生徒の書いた作文を紹介しながら問題点を考察してみよう。

⑴表題のつけ方　―八〇名の生徒の文章から―

①旅は過程　②漂泊の感情　③旅の道のり　④私と旅　⑤旅の味わい　⑥旅と人生　⑦旅のおもしろさ　⑧旅の楽しみ　⑨旅の重さ　⑩結果と過程　⑪旅　⑫私の旅　⑬生きる喜び　⑭人生という名の旅路　⑮旅はおわりのない道　⑯旅する人々　⑰真の旅とは　⑱人

生の旅 ⑲旅の意味 ⑳旅について ㉑旅 ㉒理想と過程 ㉓旅の目的 ㉔過程 ㉕理想 ㉖旅のもつ役割り ㉗人生というもの ㉘修学旅行について考えること ㉙人生と旅の精神について ㉚旅立ち ㉛出発―旅立ち ㉜旅する心 ㉝旅情 ㉞旅をする ㉟旅を知る ㊱人生は旅である ㊲道しるべ ㊳漂泊の利点 ㊴旅愁 ㊵出会いと別れ ㊶道標のない旅 ㊷迷路 ㊸人生―その長き道のり ㊹旅人 ㊺人生航路 ㊻私の旅行観 ㊼時の流れ ㊽旅の叙情 ㊾旅の想い ㊿漂泊に思う

「右の文章を参考にして」という課題であったのだが、生徒は〈旅〉ということばのわくからぬけ出ることは出来なかった。

出題者としては、後半の「日常生活において我々……」以下の内容にポイントをおくとらえ方を期待したのだが、大半の生徒は〈旅〉そのものに限定してしまった。

③生徒の作文とその考察

私の旅

S・Tさん

（第一段）

「旅」という言葉を聞くと、小さいころ読んだ絵本の中の主人公を思い出す。そこには、多くの夢や冒険があった。旅にもそれと同様のものがあると思う。

（第二段）

旅立つ前のあの心境には、未知なものに新しく触れることができるかもしれないという、ときめきがある。そのときめき故に旅は自分の心の中で大きくふくらんでいく。そうして、いつのまにか自分が、小さな子供のように、はしゃいでいるのがわかってくる。旅とは、そうした、大人の忘れ去ってしまっているロマンを与えてくれるものだと思う。

（第三段）

また、旅とは、人生の縮図でもあるだろう。松尾芭蕉は「奥の細道」の中で「月日は百代の過客にして……」云々と書いている。人間の生死は、旅の始まりと終わり。人生とは過程である旅。長いのか、短かいのかわからないもの。そして、人生という旅をしている人は、孤独な旅人。何かを求めてさすらい歩く。到達点がすばらしい所なのかどうかはわからない。しかし、旅をせずにはいられない。

（第四段）

今、私も人生という旅をしている。夢もあこがれも持っている。そして、この旅が、決して楽しいことばかりではないことも知っている。しかし、旅人として、ここで旅を終わらせるわけにはいかない。多少孤独と漂泊の想いはあるにしろ、小さな旅を数多く経験して、私の大きな旅を成功させたい。

このS・Tさんの文章構成はつぎのようになっている。

第一段　旅には夢や冒険がある。

第二段　旅は、ロマンを与えてくれるもの。

第三段　旅は人生の縮図でもある。

第四段　小さな旅を経験し、大きな旅を成功させたい。

〔起↓承↓転↓結〕という典型的な構成をしている文章である。確かな文章感覚が身についている文章といってよい。難点としては句読点のうち方、「小さい旅」「大きな旅」という表現のあいまいさをあげることができよう。多くの生徒は、「四段落からなる文章」という条件にしたがって、一応段落わけはしているものの、形式的にわけているだけで、各段落の関係意識はまだ不十分であることがわかった。

このような段落意識をたしかなものにしていくためには、平素の読解指導の過程で、文章の成立過程までさかのぼって作者の構想の展開を十分に吟味していく作業を集積しなければならない。文章の研究が各自の文章作法の習得となるような指導が必要である。生徒の記述した文章を読んで痛切に感じることは文章表現についてのきめこまやかな配慮の不足である。この点、「理解」の段階で、書く立場にたった文章研究が計画的に実践され、個々の生徒の表現力が確かなものにされなければならない。

(2)「理解」と「表現」の接点

新教育課程では、言語活動を「理解」と「表現」の二領域とした。大矢武師氏は、この経緯にふれて、

(1)指導内容の精選・集約のため

(2)領域相互間の関連を図るため

とされている。[注2]

たしかに日々の言語生活において、この「理解」と「表現」の行為は、密接な関連の上にたっている。藤原与一先生は、「読む方法の確立」という項目で、「読むこと」に関して次のように述べておられる。[注3]

（「表現生活のための基本の心がけ」で）

一　すじの通った表現をする

二　表現に情をにじませる

という二項目を立てました。この二大着眼を、読むことの方へもおしあててみて下さい。読むのは、すじをたどって読むのが、正しい読みかたということになります。つぎに、その文章ににじみ出ている情を読み味わうということになります。

「読むこと」と「書くこと」が深い関連性をもっていることがずばりと指摘されている。これからの国語科教育が「言語の教育」としての立場から再構築されようとしているとき、「理解」「表現」の相互の関連構造を見きわめ、その上にたった学習指導を展開しなくてはならない。

文学作品の読解・鑑賞のばあいにも、人物の心理・主題の把握という作業におわってしまいがちであるが、文章を十分に味読させ、言葉・文章の美しさ、いわば言語による表現の豊かさに開眼させていく指導の機会を拡充したいものである。内容主義的な国語科指導から、言語による表現過程をじっくり味わい、学習し、理解したことが自己の言語生活の場面に具現してくるという、生きてはたらく言葉の力をつけることが、私の国語教室の課題である。

言語活動における表現と理解との関連を考えていくばあいの「大局として大切なこと」について、宮地裕氏はつぎのように述べておられる。[注4]

母国語の教育は幼時だけのものではない。個人個人の自己訓練を含めて、まさに一生にわたる生涯教育の一つでなければならない。「聞くこと」も「読書」も「作文」も、みな個人個人の一生の生活態度、しなやかで深い心、強靭な精神を養う以外のことではないように思われる。

生涯教育の視点から広く母国語教育をとらえ、日々の言語行動が言語生活史の記録として位置づけられねばならない、という宮地氏の所論はこれからの私の国語教室を営んでいくばあいの基礎となるものである。

学習者ひとりひとりの言語生活史をより豊かなものにしていく、この基本的な考えをふまえつつ、「表現」と「理解」の有機的な関連のみられる国語教室を探究していきたいものである。

〈注1〉 中西　龍　「ことばつれづれ」　教育出版センター　S52・7・10刊

〈注2〉 大矢武師〝高等学校国語科はどう変わるか〟（「国語科通信」角川版No.38）

〈注3〉 藤原与一　「ことばの生活のために」　講談社　S42・3・10刊

〈注4〉 宮地　裕〝言語活動における表現と理解〟（言語生活」No.305）

（S・55・2　記）

（大分県立竹田高等学校教諭）